

ワークショップ形式の修養会の意義と課題に関する検討

—2018年春の修養会の実践報告と検討を中心に—

丹羽 牧代

(南山大学外国語教育センター)

楠本 和彦

(南山大学人文学部心理人間学科)

I. 問題および目的

1. ワークショップ形式の修養会

本稿は、プロテスタント教会であるシティ リジョイス チャーチ¹ (以後、CRCと略する) が実施したワークショップ形式の修養会について考察する。そのため、まず、キリスト教会による修養会 (retreat) やワークショップによる学びについて簡潔に記す。

(1) 修養会とは

キリスト教会における修養会は、「都会を離れた所に設けられたセンターで、いろいろなグループの人々が、指導者のもとに、祈り、瞑想、研究などを通して霊生活を深めるために、短期間ともに生活する会」(世界キリスト教百科事典、1986) と定義される場合がある。また、オックスフォードキリスト教辞典(2017) には、黙想会 (修養会) retreat という項目があり、「一定の日数を沈黙のうちに過ごし、宗教的修練に専念すること。正式の信心として、黙想会は対抗宗教改革期に導入され、「黙想の家」(retreat houses) は17世紀に建てられた。カトリック教会では、毎年の黙想会に参加する慣行が19世紀に広まった」と記

¹ 榊原康成牧師が、2004年に新しく教会を建て上げる開拓伝道の働きを始めて設立された教会である。2004年当時は、名古屋市の栄地域にはプロテスタント福音派に所属する教会がなかったことから、この地域での都市部伝道と次世代への伝道を目指して始まった。当初は、牧師の自宅であるマンションの1室を礼拝場所として始まった。その後、貸会議室を使用するなどして、現在は名古屋駅近くのCBI (キリスト聖書学園) のビルの1室を礼拝場所として使用している。自前の会堂を持たないため、CBIでの日曜日の礼拝の他に牧師自宅での金曜日の夜の礼拝や集会などをおこなっている。

されている。CRCはプロテスタント教会であることもあり、CRCが実施する修養会は世界キリスト教百科事典による説明に近い目的や形態や活動となっている。

(2) 聖書的な学びの観点から

次に、キリスト教教育、教会教育をワークショップ形式の修養会の特性と関連付けて確認しておく必要がある。ワークショップ形式の修養会は、キリスト教教育、教会教育の一部、一形態であるためである。そのために、まず、松原(2010)を参照する。

松原(2010)は、「教会教育を聖書の原点に立ち返って根本的に見なおそう」とする(p.2)。そして、「聖書的な学び」を検討の中心におく。聖書的な学びは「時代や文化を超越した聖書が教えている学びの本質」であるとして、①聖書的な学びが目指すもの、②神と人との共同作業、③生涯にわたる過程、④聖書のことばの人格性、⑤全人的関わり、⑥共同体的な学び、⑦霊的戦いの7点から検討している(p.12)。

「聖書的な学びの究極の目的は、人がイエス・キリストによって救われ、「神のかたち」が回復され、神・自分自身・他の人・被造物との本来意図された関係を回復し、神の栄光を現わしていくこと」であり、「別の言葉で言うと、聖書的な学びが目指すものは、イエス・キリストに似た者へと変えられていく霊的成長」だとする(松原、2010、p.14)。上記②～⑥は、ワークショップ形式の修養会に関連が深いと考えられる。②～⑥に関して、以下のように述べている(p.21)。

聖書的な学びは、神と人との共同作業によってなされるものであり、生涯にわたるものです。聖書の言葉には人格性があり、聞く人を神と出合わせ、悔い改めを迫り、神の愛を経験させ、神とのより深い親しい関係へと導きます。

霊的成長は全人的なものであり、5つの側面を通して現れます。聖書の真理を知り(知的)、神と人を愛し(情緒的)、よい人間関係を築き(社会的)、正誤を正しく判断できる(道徳的)という形で現されます。このような活動はすべて身体を通してなされるものですから、身体もなくてはならないものです。

さらに、聖書的な学びは共同体的なものです。私たちが霊的に成長するためには、共同体の中で暮らすことが不可欠です。教会や家庭、地域教会において、互いに愛し合い、赦し合い、訓練し合うような関係の中で、私たちは霊的に成長します。

松原(2010)の聖書的な学びに関する用語を使用すると、ワークショップ形式の修養会は、「イエス・キリストに似た者へと変えられていく霊的成長」を

目指し、「神と人との共同作業」、「聖書のことばの人格性」に導かれ、「共同体」によってなされる「全人的な関わり」による学びということができよう。

(3) スモールグループの実践とその意義

次に、ワークショップ形式の修養会に関係の深いトピックスとして、スモールグループについて概観する。松原（2017）は、「教会史の中で、教会をあるべき姿に戻そうとする試みとして、スモールグループはよく用いられてきました」とし、教会におけるスモールグループの利用の歴史についてまとめている（p.4）。ここでは、本稿で検討する、スモールグループを用いた2018年春の修養会のプログラムはKurt Lewinのグループダイナミクスやラボラトリー方式の体験学習と関連深いことを指摘するに止め、次にグループダイナミクスやラボラトリー方式の体験学習が、日本における教会生活に関する研修として導入された経緯を確認する。

本稿で検討しているワークショップと関連が深いラボラトリー方式の体験学習は、1958年の世界キリスト教協議会、日曜学校協会主催の第14回基督教教育世界大会の一行事である第1回教会集団生活指導者研修会（Laboratory on the Church and Group Life）によって、日本にもたらされた（中堀、1984、p.12）。「世界キリスト教協議会は、日本キリスト教協議会に対して、大会の一環として、グループ・ダイナミクスからのキリスト教教育へのアプローチを紹介してはとの申し出を行った。これはアメリカ聖公会教育局がパリッシュ・ライフの革新を目指してすでに研究と実践を積み重ねて成果をあげていた「教会生活におけるグループ・ダイナミクスの原理の応用」である」（坂口、1984、p.46）。第1回教会集団生活指導者研修会は、アメリカ聖公会およびカナダ合同教会より10名の指導者をスタッフとして迎えた。参加者は日本のプロテスタント教会各教派の教職者、教師、宣教師35名であった（中堀、1984、p.12）。

この研修会の目的は以下の通りであった。

教会の共同体的生活は、キリスト教信仰の伝道のための基本的媒体である。聖霊の力が各個人を我らの主にあって一つとしているようなキリスト者のグループは、日常の生活に直面し、互いに分かち合うような統一を具体的に示すことによって、此の世に対し、福音の力を宣揚するものである。キリスト者の共同体のこの意味は教会内において、知られるべきであるほどに充分には知られていない。従って、このラボラトリーの目的は、グループ・ライフへの我々の関わり具合に影響をおよぼす諸要因、諸力を探究することである。実験的特殊状況下で、これらの諸力に対してよりセンシティブになり、教会内のリーダーとしてより創造的、応答的になることをめざすのである（中堀、1984、p.12）。

このようにラボラトリー方式の体験学習が日本に導入された源の一つは、教会の共同体の意味を実現しようとする研修の試みであった。

以上のような流れと並行して、キリスト教会の福音派を中心とする群れの中では、また別系統の流れからの定期的・継続的なスモールグループが実施されてきている経緯もある。例えば、家の教会や家庭集会の運動は盛んにおこなわれている（Stott,1968, pp.112-113;松原、2017、p.4）。日本におけるプロテスタント系のスモールグループ活動の流れのひとつは、大橋（2002）によれば1990年代初頭にRalph W. Neighbour によってもたらされた。Neighbour（2010）での総括によれば、そしてその協働者であるBoren（2007）などでの位置づけによれば、スモールグループは、教会のプログラムとしてではなく、「キリストのからだ」として信徒同士が関係を結び成長していく教会の本質のひとつとしてとらえられている。牧師などの教役者が大勢の会衆に対して語り教えるという形に加えて、リーダーはいるものの、基本的にフラットな関係の中で学び協同して成長をめざすという教会形成の形が、新しいものとして導入されたわけである。その後現在に至るまで、本稿の考察対象となったスモールグループによるワークショップのような特別プログラムではないにしても、定期的に小集団での交流を持ち、それを通して信徒教育を行っている教会は多々ある。また地域教会を横断するキリスト教団体、主として若い世代を対象とする宣教団体では、このようなスモールグループでの活動を主軸にしていることも多い。CRCにおいても、特別プログラムを立てるわけではないが、3人から8人ほどの区切りで信徒をスモールグループに分けて分かち合いや学びをする定期的なセルグループ活動も行われている。このような流れは、いわゆるプロテスタント教会の福音派と呼ばれるひとまとまりの系統の教団にもっともよく継承されてはいる。

また、ロンドンのオール・ソウルズ教会における交わりのグループは、クリスチャンの交わりの三つの要素（神ご自身との関係、相互への配慮、この世への奉仕）を現し、発展させることを願い、定期的、継続的に実施されたとされている（Stott,1968, pp.126-127）。さらに、Francis Schaefferは、その著作の中で繰り返し「神は沈黙してはおられない」と語るとともに、（Schaeffer 1972）その神の語ることを聴き、問い、応答するための実践としてスイスにL'abri（＝隠れ家）というretreatの場を創設した。そこで自由な共同生活と参加者同士の分かち合いや議論を通して、全人格的な神と人との交流・人同士の交流によって信仰の成長を目指す。この活動も現在では世界各地で継承されている。アメリカ合衆国におけるキリスト教教育の中では、Gorman（2001）が指摘しているように、ある種のブームとして教会教育におけるスモールグループの役割が喧伝され、活用されたが、教会の衰退を食い止めるための手段・手段としてのみ利用され、プログラム化と定式化が進んで変質する中でこれまた衰退へ向かう。ただ、Gorman（同上）は、スモールグループは人間同士が寄り合い、

協同することで得られるものがあることをも論じ、そのためにスモールグループのデザインやプログラム、リーダーシップがどうあるべきかを記し、教会や信徒の成長のためのひとつの手段として評価を与えている。

現代日本での状況に戻れば、松原（2010）は、定期的なスモールグループのグループ活動の意義を次のように述べている。「互いに励まし合い、互いに徳を高め合う（1テサロニケ5：11）ためには、小人数の同じメンバーが定期的集まるスモール・グループが最適の形態です。そこにおいて、すべての生活経験、弱さ、失敗を自由に分かち合い、みんなで話し合い、互いに受け入れ合い、違いを認め合い、生活経験をみことばの真理によって正しく解釈していくことを訓練します」（松原、2010、p.19）。

CRCのワークショップ形式の修養会は、上に述べた定期的・継続的なスモールグループではないが、スモールグループの機能や有効性を限定的ながらも持っていると考えることができる。グループダイナミクスに造詣の深い柳原（1969）は、キリスト教教育とスモールグループとの関係について以下のように述べている。「小集団研究の成果が、キリスト教教育とかかわってくるのは、小集団が教育方法として採用されるとき、殊に小集団による成人教育、特に教職、信徒の指導性訓練においてである。キリスト教教育を、キリストについての知識伝授としてではなく、キリスト者としての生活訓練と考えると、小集団が基本的教育方法となる。出会い、対話、交わりの教育—キリストが、私たちお互いのかかわり合いの中に「うきぼり」にされるようになるような人格関係的教育過程—は、小集団の活用をまたなければならない」（p.357）。CRCのワークショップ形式の修養会は、スモールグループを活用した出会い、対話、交わりの成人教育であると考えることができる。

松原（2017）は、スモールグループをコンタクトグループ、伝道グループ、成長グループなど7つのタイプに分類するとともに、さまざまなスモールグループには①グループのメンバーのニーズに応える、②目的を達成する、③グループの関係を維持する、の3つの共通目標があるとする。CRCのワークショップ形式の修養会もまた、これらの3つの共通目標を目指している。上のタイプとしては、成長グループに分類できると考えることができる。成長グループは、聖書理解、信仰を深める、交わりを深める、互いに助け合うなど信徒が成長するためのグループである。これらのグループの目的は、洞察や理解、真理の適用、研究方法、配慮、コミュニケーション、信頼を増すことなどであるとされている（pp.7-8）。CRCのワークショップ形式の修養会は、聖書理解、信仰を深める、交わりを深める、互いに助け合うなどの成長を目指している。

松原（2017）は、スモールグループの利点として、①個人的利点と②集団的利点を挙げている。①個人的利点として、a.受容と配慮により、希望をもたらす、b.信頼と愛を学べる、c.人が変わる、d.賜物を認める、e.積極的に奉仕する、f.み言葉を実践する、g.模範を示したり、見たりできる、の7つの利点を指摘して

いる。また、②集団的利点として、a.個人では不可能なことが可能になる、b.メンバーをととのえる、c.伝道と弟子化の3つの利点を指摘している (pp.5-7)。CRCの修養会は、1年に1回程度、長くても1泊2日のワークショップ形式であるため限定的であるが、これらの利点が生じる端緒となったり、再確認できる機会となったりすると考えられる。

2. CRCにおけるワークショップ形式の修養会の概要

CRCは2004年より毎年、ワークショップ形式の修養会を実施してきた。その企画・準備や実施は、榊原牧師が主となって行っており、時には、CRCの信徒が準備や実施に協力する場合もあった。その概要を資料1に一覧表として記載した。資料1に、CRCの修養会の時期、長さ、テーマと主な内容、学び方や実習のタイプを記した。

頻度及び時間的継続性について言えば、CRCは1年に1回修養会を実施している。ただ、2007年、2010年、2013年及び2014年は1年に2度、春と秋に修養会を実施している。2013年までは、必ず1泊2日の修養会を実施していたが、2014年以降修養会の長さは短縮され1日または半日となっている。

内容について述べれば、各回の修養会において、キリスト教の信仰に関する事柄から、榊原牧師がその時々に適したテーマを設定している。そして、そのテーマに沿った具体的なプログラム内容と、それに適した学び方について検討し、実施している。テーマを概覧する。祈り (2006年秋、2007年春、2007年秋、2015年秋)、喜び (2009年春、2010年秋、2016年春)、自己理解 (2013年秋、2014年春、2018年春)、人生の最後の時 (2007年秋、2008年秋) は複数回取り上げられている。それ以外にも、赦し (2004年秋)、礼拝 (2005年秋)、出会い (2010年春)、賛美 (2011年春) などがテーマとして取り上げられている。

学び方や実習のタイプは、テーマについての学びが促進されるように、より具体的なプログラムが検討される際に同時に検討される。テーマは抽象的であるため、それをより具体的なプログラムとして企画していく必要が生じる。その際、どのような内容について学ぶのかという学びの内容を検討するとともに、どのように学ぶのかという学び方も検討している。内容と学び方がマッチすることができれば、そのテーマに関する参加者の学びが促進され、深まる可能性が高くなる。CRCの修養会では、プログラム内容と学び方を榊原牧師が中心となり、自分たちでオリジナルに創作する場合と、既存のプログラムや作品を利用する場合がある。榊原牧師による講解説教は、各回のテーマに合わせ学びを聖書に立脚するものとして認識させ、深化させることを目指して、毎回行われている。

学び方・実習のタイプについて、まずは、オリジナルに作成した場合について取り上げる。学び方・実習のタイプとしては、個人への問いかけ・個人の気づきとわかちあいと分類できる学習方法が多い (2006年秋、2007年秋、2008年

秋など)。このタイプの学びでは、より具体的な実習プログラムの中で、テーマに関して個人への問いかけが行われ、参加者はそれについて考える過程を通して、そのテーマに関する気づきが生まれる。そして、その気づきを小グループの中で、お互いにわかちあい、そのわかちあいを通して、気づきを広げ、深めるタイプの実習となっている（例：2007年秋の実習「閉ざされた村」²⁾）。小グループやペアにおける気づきの自己開示とフィードバックと分類したのもの、類似の学び方である（例：2010年春）。これらの学び方は、様々なテーマに関して、適用可能な学び方だと考えられる。それ以外にも、ロールプレイ（例：2009年春、2013年春）やディベート（例：2006年秋）も複数回実施されている。図式化も複数回実施されている（例：2005年秋、2007年春）。例えば2005年秋には、イエス・キリストと自分との距離や関係性について、自分が持っているイメージを図示して示す実習を行った。図示することによって、言葉では表現が難しい内容について、表現・伝達することが可能となる。それ以外にも、KJ法³⁾を利用した実習や聖書の内容についてのオリジナルのすごろくを作成したこともあった。

既存のプログラムを使用した場合もあった。例えば、気質分析⁴⁾（2013年秋）や賜物発見⁵⁾（2014年春）、祈り⁶⁾（2015年秋）、スーパーブック⁷⁾鑑賞（2017年春）は、既存のプログラムを利用した。

3. 本稿の目的

前節で述べたように、CRCでは、現在まで19回に亘って、ワークショップ形式の修養会を実施してきた。これらのプログラムは、ワークショップ形式という点では共通しているが、内容は多岐に亘っているため、一まとめにして考察することは難しい。そのため、本稿は、2018年春に実施された修養会の実践を報告するとともに、それを事例研究的に検討することを通して、ワークショップ形式の修養会の意義と課題を信徒とグループ・ファシリテーターという複数の視点から考察することを目的とする。その考察を、ワークショップ形式の修養会の意義に関する、より包括的な検討の端緒としたい。

²⁾ 楠本和彦・丹羽牧代（2008）. 実習「閉ざされた村」人間関係研究（南山大学人間関係研究センター）、7、pp. 141-154.

³⁾ 川喜田二郎（1967）. 発想法—創造性開発のために— 中公新書. や 川喜田二郎（1970）. 続・発想法—KJ法の展開と応用— 中公新書. を参照されたい。

⁴⁾ 平野耕一（2011）. 血液型より気質分析 プリズム社.

⁵⁾ 廣橋嘉信（2014）. 教会の形成と賜物の活用. 賜物発見の参考資料は、廣橋嘉信（日本長老教会 海浜幕張めぐみ教会牧師）の許可を得て、廣橋嘉信牧師が書かれた文章とチェックリストを用いた。2014年に改めて資料を得たが、初稿の出版年は不明である。

⁶⁾ 原作：三浦綾子 作画：のだますみ / 監修：三浦光世（2015）. 漫画 塩狩峠 いのちのことは社フォレストブックス.

⁷⁾ DVD「SuperBook Season1」日本語版（2013）. いのちのことは社・ライフ・クリエイション.（The Christian Broadcasting Network, Inc）.

Ⅱ. 2018年春の修養会の実践報告

ここでは、当修養会の実践について、報告する。まずは、準備・企画段階において話し合われたことを記し、続いて、修養会当日のプログラム実施について記す。

2017年12月から、プログラムの企画・立案を開始した。修養会は、2018年5月20日に実施された。修養会終了後、榊原牧師と筆者らが集まり、修養会のふりかえりを行った。

1. 準備・企画

2018年春の修養会は、ペンテコステの5月20日（日）の午後に実施されることが決定されていた。2017年12月に榊原牧師と筆者ら3名が集まった際、榊原牧師から、次回の修養会では、以前修養会で実施した実習「閉ざされた村」のように、現実とは異なる世界に入りこんで、何らかの選択を行うタイプのプログラムにしてはどうだろうかとの提案があり、筆者の一人（楠本）がたたき台を作成し、検討を始めることになった。

個人的な実体験を直接話し合い、わかちあうことにはリスクが伴う。とりわけCRCの修養会のように、原則として誰であれ参加可能であり、オープンな場で話し合いが行われる場合には、参加者個人の内部に立ち入る状況を設定することに留意が必要となる。ロールプレイにより、現実とは異なる世界を設定することによって、このリスクはかなりの程度回避が可能である。なぜならば参加者はロールプレイの中で実際には「自分としての判断」で動くのではあるが、ロールを取っているという共通前提があるために、あくまでもそのロールの担い手を託されたという枠組によって守られる部分があるからである。直接的個人的体験を語らないため、基本的には自己開示の度合いをコントロールすることもできるし、どこまでそのロールに自分自身を反映させるかについても決定することもできる。

12月下旬にたたき台が、共有され、電子メールによって、意見交換がなされた。2018年1月下旬に筆者ら3名が集まり、プログラムについて検討した。この話し合いにより、たたき台を大幅に絞り込んだ修正案その1の方向性が決定された。その後も、電子メールでの意見交換を続け、プログラムの修正を行った。3月に最終打ち合わせを行った。

以下に、電子メールや打ち合わせにおいて、話し合われたことや修正箇所の概要について記す。修正案その4を完成版とした(図1および資料2～8参照)。

(1) ねらい

ねらいを考えるにあたって、修養会には、クリスチャンとノンクリスチャンがともに参加することを前提にすることとした。そこから出発して次にねらい

の焦点について、クリスチャンの成長と学びが優先なのか、ノンクリスチャンに「クリスチャンの考え方」をわかちあってもらうことが優先なのかについての議論に進んだ。参加者の多くはクリスチャンであり、修養会は教会としての学びの場であるため、クリスチャンの成長や学びに寄与する内容であることは重要である。しかし、礼拝に出席し、かつ修養会にも参加するがノンクリスチャンである場合は「信徒としての学びやそれに基づいた成長の方向性への気づき」はその時点での適切なプログラムではない。とはいうもののクリスチャン・ノンクリスチャン両方の立場からの参加を前提とする以上、後者にとっても意義のある内容にすることが必要だと考えた。

両者の学びが同時に成立するには、プログラムを通して同時に学びは進行するが、それがクリスチャンにとってもノンクリスチャンにとっても、意味合いは異なっているにしても何らかの気づきや成長をもたらすものであることが必要になる。これを踏まえた上で、ひとまずねらいを絞り込んで「自己理解を深めること」とした。

自己理解の深化はクリスチャンであっても、ノンクリスチャンであっても、その人らしく、人生を豊かに生きていく上で、重要な要因である。自分の性格や与えられた資質や育ててきた能力等の特性を的確に・深く理解できることによって、人生の中で自分の特性を開花できる可能性が高まる。自己理解は、自己成長や自己実現の基盤となる。

このように誰にでも共通する人生における選択に焦点をあて、その選択から自己理解を深めることをねらいとし、さらに、それぞれの選択を伝え合うことを通して、その異同から翻って自己への理解をさらに深めることができるプログラム設定とした。このように工夫することによってノンクリスチャンにとっても、共に礼拝している身近なクリスチャンがどのように考え、行動し、どのような選択

実習「決意の時」

ねらい：

それぞれに様々な選択を行い、異なる人生を歩んできたものの、今、この場に共に集っている私達が、個人で考えたり、お互いの考えや思いを伝え合うことを通して、

- ・自己理解を深める。
- ・神様が作ってくださっている自分の姿を知る一助とする。

手順：

(125分～150分)

1.導入	修養会のテーマ、ねらいについてのメッセージ	(10分)
2.実習		
	課題の説明	(10分)
	課題の個人記入	(15分)
	課題のわかちあい(3～4名で)	(15分～20分)
	「気づきのメモ」<項目1>記入	(5分)
	「気づきのメモ」のわかちあい	(5～10分)
	榑原康成牧師の講解説教	(5分)
	「気づきのメモ」<項目2～3>記入	(10分～15分)
	お茶	(15分～20分)
	「気づきのメモ」のわかちあい	(20～25分)
	「私らしさ、私のイメージ」記入	(10分)
	おわりに	(5分)

図1 2018年春修養会 日程表

を行うかを知るという意義が生まれると考えた。

以上のような協議ののち、「それぞれに様々な選択を行い、異なる人生を歩んできたものの、今、この場に共に集っている私達が、個人で考えたり、お互いの考えや思いを伝え合ったりすることを通して」という言葉をねらいとして、表現した。

更にその後、ねらいに「神様が作ってくださっている自分の姿を知る一助とする。」を追加した。その理由は、クリスチャンにとって、自己理解とはどのような意味があるかの議論の中で、クリスチャンの自己理解において重要なのは単に自分が自分の特徴を理解することに止まらないことが確認されたからである。そして、より重要なのは神が個々に最もふさわしいものとして作り出した「神による自己像」であり、その姿を理解することではないかとの考えが榊原牧師と筆者ら3名の中で共有された。さらに、「神による自己像」と実際の自分の自己理解とのズレに気づくことから信仰の深まりが生まれる場合があることを、筆者らの体験について吟味した。その吟味を通して、この問いかけを修養会で取り上げることがクリスチャンとしての自己理解の深化に寄与すると考えた。

修養会は本来的には信徒の成長を目指すものではあるが、共に学ぶ以上は、ノンクリスチャンにとっても意義のあるものでなければならない。同時に、教会活動の一環であるからには、教会のより大きな目的である「量・質両面における神の国の布教・伝道・拡大」を目指すものでなければ意味がない。修養会への参加によって、ノンクリスチャンに、信仰に基づいた人格形成の同根性とその多様さを実感してもらうことは、キリスト教会の姿をリアルに伝えるという広い意味での伝道に寄与するという、教会の本性に沿うものとして位置づけられる。

また、原案の「自己理解や他者理解を深める」から他者理解を削除し、「自己理解を深める。」に修正した。実施に際しては他者理解を深めるパートを充実させることも可能なプログラムであるが、「神様が作ってくださっている自分の姿を知る一助とする。」を追加したため、自己理解に特化して焦点を合わせた方がプログラムとして、よりよいのではないかとの合意に至った。

(2) 導入

課題がプロ棋士を目指す過程における大きな選択という参加者にはなじみの薄い設定であるため（資料3参照）、プロ棋士について少しでもイメージできる導入が必要であると考えた。そのため、将棋会館や対局風景の写真を提示し、

その簡単な説明を加えることにした。さらに、三段リーグ⁸がプロ棋士を目指す人にとって、どのような時期かをイメージしやすいように、三段リーグの対局風景と、体験者の三段リーグに関するコメントを紹介し、三段リーグが多くの体験者にとって、いかに過酷な時期であることを説明することにした（資料2参照）。その説明により、課題における選択がいかに切迫したものであるかをよりイメージしやすくなることが期待された。

(3) 課題

ねらいの検討と並行して、課題内容についても検討した。たたき台は、内容が多すぎるため、学びが拡散し、気づきが深まらない危険があった。そのため、課題を絞り込んだ（資料3と4参照）。

1) 設定の概要

以下の状況にある人物（じゅん）になるように設定した。

①名古屋にある有名私立大学の3年生であり、かつ、将棋のプロを目指す、奨励会に入っており、現在、勝ち抜くとプロ棋士になれる三段リーグで戦っている。

②21歳になった今期も四段に昇段することはできなかった。三段リーグを何年も勝ち抜くことができず、だんだん自信がなくなってきて、自分は本当にプロ棋士になれるのか、大きな不安を抱えている。

③じゅんがクリスチャンであるかないかは、参加者がクリスチャンである場合もそうでない場合もあるため、参加者自身が選択できるようにした。

④じゅんの性別は、自分の実際の性別と同じとする方が、自分に引きつけて考えやすいと思われる。だが、あえて別の性別として設定することを選ぶことを禁じないことを口頭で説明することにした。

2) じゅんが迫られている選択の概要

選択について、以下のような説明文を示すことにした。

今、あなたが迫られている大きな選択は、次のようなものです。

数ヶ月後の4月に、将棋のプロを目指し、将棋と学業を両立させるのか、あるいは今年は大学を休学して、将棋に専念するのか、それとも将棋のプロになることは諦めて、就職活動をするのかの選択を迫られています。そして、どの道を選ぶのか、将棋の師匠と自分の両親と、三日後に伝えなければなりません。

⁸ 奨励会について：「三段から6級までで構成されており、二段までは東西にわかれて行い、規定の成績を上げると昇級・昇段となります。三段になると東西をあわせてのリーグ戦を半年単位で行い、上位二名が四段に昇段し、正式にプロ棋士となります」（日本将棋連盟のwebpageより <https://www.shogi.or.jp/match/shoreikai/>）

この選択に関連する事項として、三段リーグの仕組みや、じゅんの奨励会での履歴等を示すことにした（資料3参照）。

3) 課題

上記の選択を巡って、以下のような課題を設定した。

課題：

幸いにも、3日後まで、対局も大学の授業もないため、この3日間はこの選択をするために、自由に時間を使うことができます。

- 1) あなたは、この3日間をどのように使いますか？できるだけ具体的に考えてください。例えば、人に相談するとしたら、どのようなことを、誰に相談したいですか？
- 2) そのような過ごし方を選んだ理由はどのようなものですか？
- 3) プロ棋士を目指しますか？それともプロ棋士は諦めて、就職活動を行いますか？
- 4) その選択をする時に、大事にしたことは何ですか？

考えるヒントとして、3日間の過ごし方について、「人に相談する」「神様にひたすら祈る」「一生懸命、一人で考える」などを例示することにした（資料4参照）。

上の課題を記すシートを配布することにした（資料5）。シートでは、上記3)の項目に関して、①将棋のプロを目指し、将棋と学業を両立させる、②将棋のプロを目指し、今年を大学を休学して、将棋に専念する、③プロ棋士は諦めて、就職活動を行う、を例示し、選択の手がかりとなるようにした。これら以外の選択の可能性もあるため、④その他に自由記入できるようにした（資料5参照）。

本課題は、参加者の実人生における実際の体験を通しての学びではなく、プロ棋士を目指すじゅんという人物になって、選択を行うというものである。選択内容は、人生における大きな岐路になりうるものであり、選択やその選択を行うまでの過程には、実際の体験ではないものの、各参加者の考え方や価値観や行動の仕方等が反映されると考えられた。

また、このような課題を参加者全員が行うことによって、共通の場面設定の中での各自の選択を比較することができる。その比較を通して、選択内容の異同から、それぞれの自分らしさや自分の特徴がより明確に浮かび上がると考えられた。ここにはクリスチャン、ノンクリスチャン双方にとっていくつかの気づきがあることが大枠で想定されよう。すなわち、クリスチャンにとっては

・キリスト教的価値観に基づいた指向性と共通項

- ・キリスト教的価値観に基づいていることが前提であっても浮かび上がる多
様性

ノンクリスチャンにとっては、キリスト教的価値観に基づく発想が前提とされ
ていないことから

- ・クリスチャンの他メンバーの多様性と共通性が同時に存在していることの
発見

・ノンクリスチャンである自分とクリスチャンとの異同への気づき
ということになろうと予測された。

(4) 個人で行った選択のわかちあい、わかちあいによる気づきの個人記入と そのわかちあい

個人の選択に関しては、じゅんの立場で考えたことではあるが、最終的には
自分自身の選択の仕方が反映される。この個人の選択記入の段階でも、言語化
によって自分の特徴への気づきが生まれる。さらに、課題シートの1)～4)
の項目について、3～4名の小グループでわかちあいを行うことにした。この
わかちあいによって、それぞれの項目に関して、グループ内の他の参加者が記
入したことと、自分の記入内容とを比較することによって、自分の特徴への気
づきを促すことができると考えた。

わかちあいを15～20分行うことで、参加者全員が各自項目1)～4)につい
て、伝え合うことができると考えた。

わかちあい後、わかちあいによる自分らしさや自分の特徴についての気づき
に焦点を合わせるために、「気づきのメモ」の項目1(資料6)に個人記入した。
項目1を記入することによって、他者との比較を通して気づいた自分らしさや
自分の特徴をより明確にできる。

個人記入後、「気づきのメモ」の項目1のわかちあいを行うこととした。こ
のわかちあいによって、上記課題における気づきや学びのまとめになることが
期待できるからである。そのまとめが区切りとなり、次の課題である「自分自
身の経験に基づいて考える」という課題に移行しやすくなる。

(5) 榊原牧師の講解説教

次の実習に入る前にその課題を考える準備として(資料6参照)、榊原牧師
からの聖書講解を行うことにした(図1参照)。

次の実習は、自分に戻り、①自分自身の今までの大きな選択をしようとした
時や歩みの中で迷った時に、神や周りの人々と、あなたはどのように関わり、
語ってきたか、②神が自分に求めておられる自分の姿や生き方を意識したこ
とがあるか?神が自分に求める姿は、自分が思っていた自分の姿と一致してい
たか、ズレがあった等について考えるというものである。

プログラムが聖書の言葉をどう実践するかを考え学ぶということを目指して

いるものであるために、聖書に基づいた牧師からのメッセージは、前半でのロールプレイの意味を確認し、後半の実習が意義深いものになるために重要であると考えられたが、必要なポイントを伝えるには、修養会の時間内に納めるのは困難だと予想できた。そのため、修養会当日午前中の礼拝の牧師による講解説教の際にも、この実習内容に関連するメッセージを行うことにした。礼拝内でのメッセージでは新約聖書「使徒の働き」から、使徒のパウロを取り上げて、自分の理想とする姿を求める生き方から、神が自分に期待している生き方へと変換した喜びを語ることにした。修養会内でのメッセージは、短い時間で、パウロが目指した自分が正しいと信じる姿から神に期待されている姿への転換について語ることにした。実習前半の内容から切り替えを行うとともに、後半の内容の導入となることを目指した。

(6) プログラム後半：「気づきのメモ」項目2と3の個人記入

プログラムの後半では、前半のロール（じゅん）から離れて、自分に戻って考える設定にした。そして、以下の項目に関して、考え、個人記入することを参加者に求めることにした（資料6参照）。

2. 以下のような時に、あなたは、神様や周りの人々と、あなたはどのように関わり、語ってきましたか？また、もらった言葉などで、心に残っていることはありますか？

<自分自身の今までの大きな選択をしようとした時>

<歩みの中で迷った時>

3. あなたは、神様が自分に求めておられる自分の姿や生き方を意識したことがありますか？それは、どのような時、どのようなものでしたか？また、神様が自分に求める姿は、自分が思っていた自分の姿と一致していたでしょうか？それともズレがあったのでしょうか？ズレがあったとすれば、それはどのようなズレだったのでしょうか？

<どのような時>

<どのような内容>

<神様が求める姿と自分が思っていた自分の姿との一致・不一致>

後半の実習内容は、「神様が作ってくださっている自分の姿を知る一助とする」とのねらいの達成を目指したものである。より具体的には、項目2にある

ように、①大きな選択をしようとした時や歩みの中で迷った時などの、自分の人生の岐路において、自分が神や周りの人々と、どのように関わり、語ってきたかについて、焦点を合わせるものである。さらに、項目3にあるように、②神が自分に求めておられる自分の姿や生き方を意識したことがある場合、そのことに着目し、自分が思っていた自分の姿と神の計画している自己の姿との一致・不一致に焦点を合わせる問いを置いた。

上記①は、クリスチャンにとっては、自己の信仰において、神との縦の関係性と周りの大切な人々との横の関係性を考える上で重要な点だと考えられた。ノンクリスチャンにとっても、大きな選択をしようとした時や歩みの中で迷った時などの、自分の人生の岐路において、周りの重要な人々とのどのような関係性を培ってきたか、それらの人々から受けるソーシャル・サポートの有無やその内容をふりかえることは自己理解を深める上で重要なことだと考えた。あるいは、キリスト教の神以外の神や仏に祈るという経験があるノンクリスチャンの場合、そのような縦の関係が自分にとって、どのような意味があったのかについてふりかえる契機となると考えることができた。

上記②については、神が自分に求めておられる自分の姿や生き方を意識する時、自分が思っていた自分の姿と神が自分に求める姿にズレがあることに気づく場合があることが想定されていた。

これらの項目は、ノンクリスチャンの参加者にとっては、記入できない可能性が高いこと、また、非常に個人的な体験に関するものであることを考慮して、「すべての項目を記入する必要はありません。書ける項目だけで結構です。また、このメモを基に、話せる範囲内で再度語り合います。メモは提出せず、自分で持ち帰ります」との言葉を記載することにした。

(7) 「気づきのメモ」項目2と3のわかちあい

「気づきのメモ」項目2と3のわかちあいを実施することにした。各自が話す内容を吟味し、可能な範囲内で話し合うことによって、信仰上における重要な体験やその体験を巡って考えたことや気づいたことや変容について理解を深めることに寄与する。このプロセスを経て「自己理解を深める」というねらいを達成することができるとともに、今回はねらいとはしなかったが、グループの他の参加者への理解の深化も促進できると考えた。

(8) 「私らしさ、私のイメージ」記入

修養会の実習のまとめとして、「私らしさ、私のイメージ」の記入を設定した(資料7参照)。修養会を通して、気づいたあるいは再認識した、自分らしさや自分のイメージを、最後に表現することが、個人のまとめとしての成果物となると思った。表現方法が各個人にフィットするように、言葉で記すことも絵(色や形や線)で表現することも各自が自由に選択できるようにした。

(9) アンケート

修養会の最後に、匿名で、アンケートの記載を求めることにした。項目は、満足度、意味度、修養会で感じたこと、考えたこと、気づいたこと、学んだことなどについての自由記述であった（資料8参照）。

2. 実施

本節では、修養会で実際に行われたプログラムの概要について記す。修養会当日の午前中に行われた礼拝中の説教内容は、意図的に修養会のプログラムと関連する内容としたため、説教の概要も報告する。

修養会のプログラムは、一部で時間の延長・変更はあったものの、プログラム内容は変更なく計画通りに実施された。

(1) 礼拝における講解説教内容の概要

聖書箇所、説教題、メッセージ内容は以下の通りである。

聖書箇所：使徒の働き 9章18～22節

説教題：「パウロから主のしもべへ」

メッセージ：パウロは、ユダヤ人として正式に律法を学んだ人物であり、その実践に熱心であったため、初めはイエスを救い主と信じるキリスト教の信者を、律法を否定して間違った教えを信じる者たちと考えて激しく迫害した。しかし迫害者として活動をする途上で、イエスとの真の出会いを通してイエスこそが救い主である神と信じた。

そして、迫害者から主のしもべである使徒となって、福音を伝える働きに仕える人へと変わった。

聖書の言葉を誰よりも熱心に求める中で、神に自分が求められているふさわしい姿、あるべき姿を見出して使徒となり、殉教する日まで神に従い通した。

人は誰もが神に期待されている働き、生き方があることをパウロの変化から学び、自分の進むべき道を探ることができる。

(2) 修養会の導入

榊原牧師によって、導入が行われた。プリントが配布され、ねらいの説明がなされた。自己理解の深化を目指すのが、特に、神が作ってくださっている自分の姿を知ることが重要であることが参加者に伝えられた。事前に準備していたグループ構成を発表し、3～4名の参加者からなる小グループを作った。

ファシリテーター（進行役）を楠本に交代した。日程表を示しつつ、ファシリテーターから、①今回のプログラムは大きく前半と後半に分かれること、②前半部は、現実とは異なる場面設定の中で考えること、③そのような場面設定をする理由（全員が共通の場面設定、枠組みの中で考え、選び、それをお互いに比較することによって、その異同から翻って、自分らしさや自分の特徴が明

確になりやすいこと)が伝えられた。

(3) 実習の実施

1) 実習の導入と設定に関する説明

ファシリテーターが、設定を記した用紙(資料3)を示し、設定の前半部分を読んだ。そして、設定にある状況を理解し、じゅんという人物になって考えることを行いやすくするために、スライドを提示しつつ、その説明を行った(資料2参照)。

じゅんが迫られている選択について説明した(資料3参照)。

その後、質疑応答を行った。設定に関するいくつかの質問がなされ、それについて答えた。

2) プログラム前半部の実施

課題を記した用紙(資料4・5)の項目について、ファシリテーターが説明した。選択を行うヒントとして用いることもできる例についても説明した。個人記入後、これらの項目について、小グループでわかちあいを行うことを伝えた。

個人記入後、わかちあいを行うことの意味について、ファシリテーターが再度説明し、小グループでわかちあいを行った。

課題のわかちあい後、「気づきのメモ」(資料6)の項目1の個人記入を行った。その後、小グループで、項目1について、わかちあった。わかちあい終了後、①ここまでがプログラムの前半部であること、②後半は、榊原牧師が進行を行い、ロールから離れ、自分に戻り考えていくプログラムになること、③その橋渡しとして、次に、榊原牧師からのメッセージがあることを伝えた。

3) 榊原牧師による講解説教

聖書箇所、説教題、メッセージ内容は以下の通りである。

聖書箇所：使徒の働き 9章18～22節/使徒の働き 13章～15章/テモテの手紙第二 4章11節

説教題：「なりたい自分と神の望まれる姿」

メッセージ：パウロは選民イスラエル人としての誇りを持ち、モーセの律法を厳守する人であった。そのためイエスを救い主と信じる人たちを律法に背く人と見ていた。彼らを迫害することが神に従う道だと信じて行動していた。

そのパウロが救い主のイエスとの真の出会いを通じて変えられていった。

神は、パウロの弱点を使徒として仕える中で変えていった。自分が自分の才能や経験に自信を持つ強いパウロではなく、人としての弱さを認め、謙遜で愛のある人へと変えて豊かに用いた。隣人のために犠牲を払うパウロの最終的な姿は神に期待された姿に近いものであった。

4) プログラム後半部の実施

用紙を用いて、「気づきのメモ」の項目2と3の説明を行った。この項目は個人的な経験に関するものであるため、①すべての項目に記載する必要はないこと、②このメモを基に、同じ小グループで話せる範囲に限って、再度わかちあいをを行うこと、③メモは提出しないことを伝えた。個人記入の所要時間にばらつきがあったため、記入が終わった人から、お茶休憩に入ることを伝えた。

休憩終了後、小グループでわかちあいをを行った。

プログラムの個人のまとめとして、「私らしさ、私のイメージ」記入用紙（資料7）に、参加者は、修養会を通して、気づいたあるいは再認識した、私らしさや私のイメージを表現した。色や形や線でも表現できるように、小グループにクーピーを配布した。多くの参加者が絵で表現した。

最後に、各グループから一人が代表して、今回の修養会の感想や気づきなどについて、発表した。

プログラム終了後、アンケート（資料8）の記載・提出を求めた。

Ⅲ. 2018年春の修養会に関する検討

ここでは、2018年春の修養会の企画・準備、実施、プログラム等に関して、参加者アンケートや筆者らの所感を質的なデータとして取り上げ、意義や今後の課題について検討する。企画・準備に関わった筆者らがそれぞれ異なる視点から多面的に検討することを通して、今回のワークショップ形式の修養会がもつ多様な側面について、できる限り明示化することを目指す。

1. 信徒の視点より

ここでは信徒にとっての学び全般の意義と、このような形での学びの意味するもの、その効用及び限界について述べる。

まず学び全般についての一般論であるが、通常の場合信徒が学びえる方法としては（1）信徒用の神学校プログラム（2）独自の聖書研究（ひとりで聖書を読む・黙想するといった広義のものも含む）（3）礼拝や集会における牧師の説教・奨励等があげられる。しかし現実的には日曜の礼拝でメッセージ（説教）を週に一度聴くというあたりが、日本の教会の一般的信徒の平均的な姿であろう。この状況の中で、一番欠け易い側面は「適用と応答」及び「聖書全体に立った視点」であると考えられる。この二点について、本プログラムのようなタイプの学びがカバーし得る点や届かない点について検証しよう。

（1）トップダウンとしての説教

プロテスタント教会にとっては聖書が信仰の中心であるといっても過言ではないわけであるし神学による重点の置き方等に差異があるとはいっても、礼拝プロ

グラムにおける説教が占める割合は時間的にも位置づけ的にも非常に大きい。そして権威を託された説教者が「みことばを語る」「みことばについて語る」ことを傾聴するという姿勢はおそらくどの信徒でも持っていると考えられる。ただし、このいわば「トップダウン」による学びは、信徒が現実の信仰生活の中で「どのように振舞う『べき』かを問い、迫って来る」内容になるのはなかなか難しい面がある。ひとつには物理的・時間的制約があり、もうひとつにはまさしくトップダウンであることの本質的な側面、選ばれた話者から不特定多数に向けてのメッセージである、ということに不可避の制約であろう。このことは著名な神学者の書いた講解書や注釈書、あるいは信仰への指針をまとめた著作などから学ぼうとするときにも当てはまる。

注釈書を読むにしても説教者から聖書に基づいた生き方の奨励を受けるにしても、基本的な神の存在・原罪や罪の指摘・救いとその受容といったメッセージのほかに、多くの場合伝えられるメッセージは「キリスト者はこうあるべき」であるという指針であり、人間がどのように生きることを神は望んでおられるかという教示であることが多い。そのこと自体は無論重要な点である。しかし多くの場合「このように生きるべきである」といういわば理想と、そこに向かう成長途上の姿の間には乖離があるのが当たり前である。完成された信仰をもって始める信徒はひとりもないのであるから。この乖離はあって当然のもので是非もないが、この乖離を埋める努力や手段については、残念ながらそれほど意識化されないというのが信徒としての実感でもある。「大事なエッセンスはこれとこれである」と先に示されてしまうことによって、そこで思考停止してしまうことはよくある。そのエッセンスに示されたことに即して自らの現実を検討するという自律的な学びには訓練が必要だからである。そしてそのような「適用を学ぶ練習の機会」があまり多くはないことが遠因であろう。

説教等はエッセンスを説くものとして欠かせないものではある。しかし、その弱点として、ひとりひとりの状況にあてはめた個人的なものには成り得ないということがある。例えば信徒として「常に祈りなさい」という聖書からのメッセージを説教として聴くとき、その「常に」とは現実の自分の日常の中のどの場面のことを指しているのかまで具体的に思い描くことができる聞き手もいれば、できない聞き手もいるであろう。「常に」と言われるが24時間ずっと祈り続けていくことは現実には不可能である。だとしたら、この「常に」は個々にとっては何を指すのか。多くの場合は個人の理解できる範囲の中で処理するのが人の常であるので、ひとつの例として、「常にの意味は比喩的にたくさん祈ることを示しているのであろう」と解釈してそのまま「落ち着かせる」。そしてこれらの解釈は大概の場合他者に明かされることはめったにない。人生の重大な局面が訪れたときに、長期にわたって深いかわりを持った信仰上の友人やクリスチャンの家族などに、聖書の生き方をどう実人生に適用するべきかについて深く意見を交わしたり、アドバイスを受けたりということはもちろんあ

るだろう。しかし、人間が赤ん坊の時代から子どもを経て大人へと日々の活動の中で成長していくように、段階を経て時間をかけて、その人自身を建て上げていくような信仰のあり方を考えるとき、むしろ大事なのは大事件の起こらない日常への信仰の適用だと思われる。が、いわば原理原則しか書いていない聖書の教えを卑近な日常生活の中にどのように当てはめるかについては信徒それぞれに任されている。個人と神の関係を重視する信仰のあり方の良い点でもあり弱点にも繋がるということである。

(2) 受け取っているはずのものはどこにあるか

以上を踏まえて、学びのひとつの様態である体験型学習である本プログラムについて述べる。このプログラムにおいてはロールプレイであるという一種の安全枠に守られてはいるものの、実際には自分自身の内面的な信仰上の態度がかなりの程度反映されるように作られている。本プログラム実習のようなロールプレイ型体験学習において、学びの中核をなすのは「自分であればどうするのか」という個人的な思索であり（擬似）決断・選択である。加えて、そもそもこのプログラムは教会で行う「修養会」として位置づけられており、プログラム途中にクリスチャンであるかどうかの設定がある。このことから、参加者は程度の差異こそあれ、キリスト者としての価値観とそれに基づく思考と行動を問いかけてられていることを無意識のうちに前提とするであろう。であれば、参加者は（ノンクリスチャンを除いて）個人的であり現実的な問題に直面したときに、クリスチャンとして自分はどのように振舞うかを自問していくことになる。

このように、自分はクリスチャンとしてどのように振舞っているのか、について意識化できることがまず第一の利点である。前述のように、よほど重大な人生の局面を除いて、聖書からの説教を自分がどのように受け取っているのか、受け取ったあとそれをどのように内面化させているのかを他者に語る機会は少ない。それどころか意識化することも少ないかもしれない。本人の気づきを超えて実は受け取ったものが育っている場合もあるし、受け取っただけで休眠状態になっている場合もあろう。養われたものが自分の中でどうなったのかを意識化することの効用は、自分の信徒としての姿を的確に知ることと、その現状認識を出発点にして更に成長に向かえるということであろう。

第二の利点は意識化ができた段階で、これまでの自分の在りようを振り返って、どのように聖書の示す価値観に沿ってきたか、あるいはこなかったのか、を検討できるところである。さらにそれは同様の信徒の立場である他者とのわかちあいを通じて、気づかなかった側面を発見することもできるということにつながる。いわばトップダウン的に聖書からの教えとして受け取ってきたものが、現実の中で生きているのかいないのか、どのように活かすことが可能なのか、活かすことのできる領域に実は限界を設けていなかったのかなど、さまざま

まなことを問いかけてして迫られることになろう。このようなプロセスを経て、「では自分はいかに生きるべきか」を再検討・再構築することになり、それが行われる仕組みを提供するという点でワークショップ型の学びは信徒の助けになるであろう。

これらの過程は、実はこのようなプログラムではなくても週ごとの説教⇒受け取り⇒吟味⇒適用ということが個人的に実践できれば可能であるし、実際、多寡は別としても多くの信徒はこれを実行していると考えられる。しかし、本プログラムのような形式をとることで、それを一気に顕在化させ促進することが可能なのではないだろうか。すなわち、聖書の語る価値観を受け取ったあとそれを自分自身の中にどのように活かすのかという適用面において、成長を促す機会になるということである。

また、このわかちあいそれ自体がコミュニティとして行われるという側面によっても、適用と成長の効果がもたらされる。クリスチャングループに限らず、対人交流から生まれる心的成長の効果については一般的にも検証されているが、キリスト教会におけるコミュニティでも、それが大きく働く。なぜなら、メンバーは通常の社会的集団よりはる意味多様性の幅が大きい。共通項が「教会に集っている・その価値観を（少なくとも）受け入れている」の一点のみに集約されるからである。多様で多彩であるメンバーが、世代・職業・社会的立場・その他の差異にもかかわらず、「神の前の個」というフラットな関係を結び、最終的に根ざすところと「神の似姿」を目指すところに大きな共通の枠を持つ。個々の差異の振れ幅の大きさと、それにもかかわらずどの個性ももれなく「神の似姿」として受容されていくという、その独特の心理的一体感が自己理解とその肯定や自己成長への前向きな動機づけを生むことになる。シンプルに言って、神との関係やそれに基づく自分の内面を語り分かち合うことは、信徒にとっては楽しく聖書と現実の自分とを結ぶことになるのである。⁹

(3) ボトムアップであるが故の欠落

次にこのようなボトムアップ的な学びの危うさを述べておく。

説教・講解などがどこまでいっても一般論にしかならないという弱点は、一対多の教授の際に必ず起こることではある。そして最終的には自ら気づかない限り人は変わらないというのもまた真であろう。その意味で、信徒として自分がどう生きているのかを自律的・意識的に振り返る機会となるのはワークショップ形式の良い点であることには間違いはない。分かち合いの効用は多様性を実感できること、一体感も持ち得ること、現実感を持って聖書に向き合う

⁹ ここにはどの程度本当のことを出せるかという問題が関係してくる。そしてそれは個人の資質の問題だけでなく、それができるだけの下地がどの程度プログラム参加者のコミュニティにできあがっているかに深くかかわる。また本当のことを安心して出せるような一種のセーフティネットをプログラムに内在させることも非常に重要となる。

他者の存在を認知できることなど様々にあるのも事実である。しかし、一般的な精神的成長を目指す自律的な学びと、教会教育における同様の学びには大きな特性の差がある。このことが、自律的・ワークショップ的な学び方を教会教育で行うとき、そこに欠落しかねないもの・実施者が留意しなければならないもの、へと繋がる。

その特性の差とは、誤解を恐れずに言えば、信徒としての向かうべき成長には明確な定められた方向性があり、「キリストの似姿を目指していく」という「正解」が存在しているということである。¹⁰このある種の明快な絶対的正解については、どこまでいっても限界がある個人の尺度で測ったりその実態を定義づけたりすることは本質的に不可能である。違う表現をすれば、有限の人間が無限の神に成り代わって「これがあるべき姿」と言ってしまうのはそもそも不可能であるということである。信徒同士の分かち合いから学んだ信仰の見方、考え方、態度などは、信仰実践上有益であることは否定されるものではないが、あくまでも人間同士の、しかも大層限られた経験から限られた人数内で生みだされたものであることをわきまえておく必要があるであろう。ボトムアップで組み上げられたものは、極めて小さな部分に過ぎないことと、聖書全体に照らし合わせたときにそれがどう位置付けられるものなのか、すなわち「正解」との関係性を俯瞰的に吟味し説き明かすフォローが必然となる。

もう少し具体的にその欠落・弱点とそのフォローアップを検討しよう。ボトムアップの場合、分かち合える内容は、最終的には参加者の経験値の総和でしかない。スモールグループでの学びの場合は、どれほど人数を多めに設定してもせいぜい6人程度であり、分かち合いによって知り得る他者の信仰のありようもその人数分でしかない。2000年にわたる聖書研究をベースに、聖書全体を俯瞰したうえで部分を説き明かすトップダウン的聖職者の視点による説き明かしとはその点が大きく異なる。語られたことがすべてではないという状況は同じであっても、全体の中での位置づけが明確なトップダウン的聖書講解ピースと、場合によっては、得たものが聖書全体から見て何を示し、自分にとってどういう意味があるのか不明のまま迷子のまま終わってしまう可能性も否定できないボトムアップ型のピースの差異と言ってもよい。

(4) 「正解」と導き手

ワークショップで得たものが、その場ではすぐに役立つものにならないとか、すぐに身にならない、実を結ばないということ自体は、教会外のワークでは珍

¹⁰ もちろんこのことは没個性になることや画一的な価値観に凝り固まることを目指すこととは異なる。究極の成長した信徒の姿は、おそらく最大限に個性的であると同時に、キリストが説いた人としての在り様を共通の核心として持つ姿であろうと思われる。しかし、この「正解」を、数少ないケースでの個人の価値観・共同幻想・体験に基づいた解釈のみ、などで目指すときに「キリスト教信仰」の衣をまとった危うい言説や危うい行動・カルトの様相が現れるのは歴史的にみても明らかであろう。

しいことではない。変革や自己成長には時間と実体験の積み重ねも必要だからである。しかし、信徒の目線と言えば、目指す先にはある種の正解がある、ということが心理的葛藤とプレッシャーを生む。よって、最大の利点でもある「自分の中の信仰のありようを主観的に主体的に探る」というワークショップ的試みはそのまま最大の欠点にもつながるように感じられる。つまり、他者との分かち合いによって得られた視点や価値観への揺さぶりは確かに生き生きとしたものをもたらし、自分が保ってきた信仰の枠を再構築するよい機会となるのだが、と同時に、先に述べた「正解」との関連付けの難しさがかえって浮き彫りになってくるのである。例えば、ある程度成長をみた信徒ならば、好き勝手にどこへ向かっていてもよい、どんな枠を定めてもよいというとりえ方はしない。信仰的成熟が進むほど、聖書によって示される世界、すなわち「神の国とその義」とされているものは「今ここ」に「自分の中に」「自分たちの間に」完成されてはいないという認識を持たざるを得ないからである。ワークショップによって浮かび上がって自分自身と自分の信仰として設定した枠が「これでよいのか」「間違っているのか」を自問することになる。一信徒に過ぎず、圧倒的に学びの足りない、体系的にキリスト教の全貌を知っているわけでもない自分は果たしてあるべき方向へ向かっているのか、と。ボトムアップ的ワークショップの場合、信仰の適用という意味でよい学びの機会になるのは確かであるが、このように学びの着地点を自分で探さざるを得ない。そしてその着地点が、キリスト教の教理全体から導き出される信徒の成長や信仰のあるべき姿から乖離してしまうと、本来の修養会の方向性から大きくはずれていってしまう。ところがその吟味・検証となると、困惑にぶつかるのである。もしくは「その時点での自分の見識のみで自分自身を肯定または否定する」という陥穽に陥ることになりかねない。

そういうわけで、ここに指針をもたらし、導き手となり得るものが必要となる。つまり先に述べた「聖書全体を踏まえたうえでの視点」であり、キリスト教の示す「絶対的他者」＝「神」の視点だろう。その視点をもたらしてくれる講解メッセージの説教者は、体系的な学びと神学を前提に説教を組んでおり、月間・年間・10年20年のスパンという視点を模索し構築しながら説教を展開していく。しかし、通常の場合、信徒はそうではない。もちろん毎日のように聖書通読をする信徒もいるし、講解書を系統的に勉強する信徒もいる。だが、多くの信徒は日常の中で試行錯誤しながら、その日常が実は聖書における「神の国」とどのように繋がるのかに確信を持ってない、あるいはそもそも気がつかないままに過ごすのが実情であろう。その在りように深く切り込むことのできるワークショップ形式の学びの効用は多いが、同時に、その特性ゆえに主観的になりがちな主体的学びを的確に位置づけるフォローは欠かせないものと思われる。

以上のことから、この重要な絶対的視点を喚起するフォローアップが非常に

大事で不可欠なものと感じられる。具体的にいえば、「学んだことは何か」「自分の現実の中でその学びはどういう意味を持つのか」「今の自分はどのような姿でどこに立っているのか」などを、聖書全体の示す「神の国とその義」に照らしてくれる、あるいは鏡のように客観的に示してくれるものの存在である。その意味でワークショップの限界を踏まえて、その位置づけを行う仕組みとしてのフォローアップ講解メッセージや、学び自体の振り返りが重要であろう。

2. アンケート結果について

参加者14名からアンケートが提出された。以下にその概要を記す。アンケートは無記名であるが、アンケートの匿名性をさらに高めるため、分析には榊原牧師が満足度や意味度の数値、コメントを項目ごとに一覧としてタイプした資料を用いた。

満足度（項目1）についての回答は、3が1名、5が3名、6が2名、7が8名であった。意味度（項目2）についての回答は、4が1名、5が3名、6が1名、7が9名であった。

項目1～3の自由記述には、計32個のコメントがあった。それらの意味することをKJ法（川喜田、1967; 川喜田、1970）によって、分析した（図2）。

分析の結果、「自己理解の深化」、「話し合いによる他者理解の深化」、「当修養会への肯定的見解と課題の指摘」の大きな島が見いだされた。「自己理解の深化」と「話し合いによる他者理解の深化」とはお互いに関連していると考えることができた。それらが、「当修養会への肯定的見解と課題の指摘」に影響していると考えることができた。

「自己理解の深化」は、「自己と神様との関係への気づき」と「ふりかえりや話し合いによる自己理解の深化」から構成されていた。「自己と神様との関係への気づき」内には、「神様の導きや自分に求めている姿への気づき」と「自分のみこころへの応答や祈りについての気づき」があった。「ふりかえりや話し合いによる自己理解の深化」からは、「神様の導きや自分に求めている姿への気づき」と「自分のみこころへの応答や祈りについての気づき」があった。「ふりかえりや話し合いによる自己理解の深化」からは、「神様の導きや自分に求めている姿への気づき」と「自分のみこころへの応答や祈りについての気づき」があった。

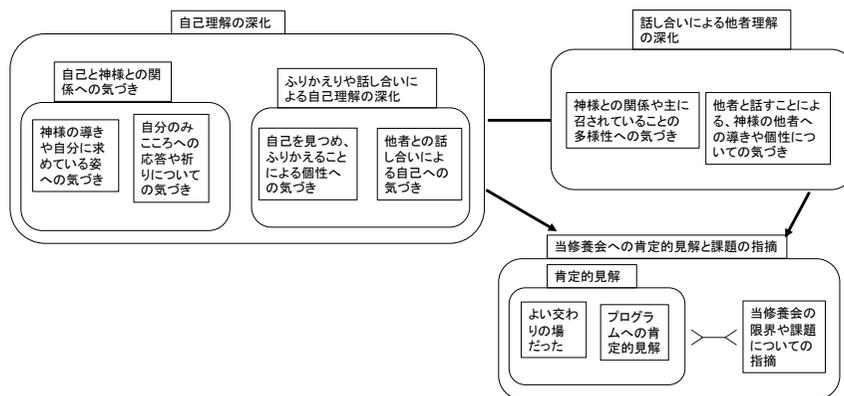


図2 当修養会についての参加者からのコメント

し合いによる自己理解の深化」内には、「自己を見つめ、ふりかえることによる個性への気づき」と「他者との話し合いによる自己への気づき」があった。

「話し合いによる他者理解の深化」は、「神様との関係や主に召されていることの多様性への気づき」と「他者と話すことによる、神様の他者への導きや個性についての気づき」から構成されていた。

「当修養会への肯定的見解と課題の指摘」は、異なる見解とみることができ「肯定的見解」と「当修養会の限界や課題についての指摘」から構成されていた。「肯定的見解」内には、「よい交わりの場だった」と「プログラムへの肯定的見解」があった。

3. グループ・ファシリテーターの視点より

筆者（楠本）は、南山大学人文学部心理人間学科や人間関係研究センターや北海道ヒューマンインターアクション・ラボラトリー¹¹などで、ラボラトリー方式の体験学習を中心としたグループ・アプローチをファシリテーターとして実施している。そのため、本節では、グループ・ファシリテーターの視点から考察する。

「2. アンケート結果」と「3. グループ・ファシリテーターの視点より」を中心に、草稿を本修養会参加者に渡し、加筆修正が必要であれば、筆者たちまで連絡するよう依頼した。匿名性を守るために、加筆修正意見は榊原牧師を経由して筆者たちに連絡するよう（筆者たちには誰からの意見かわからない形）伝えた。修正意見は、1か月以内に連絡するよう伝えた。このような手順を踏んだが、修正意見はなかった。

当修養会で実施したワークショップは、厳密にはラボラトリー方式の体験学習とは言えないかもしれない。ラボラトリー方式の体験学習では、グループや対人関係において今・ここでまさに起こっていること（プロセス）に焦点を合わせることを重視するためである。しかし、当修養会のワークショップは、グループメンバー同士の相互作用を通して、メンバーが学び・気づきを得ることができるという形式において、ラボラトリー方式の体験学習と共通点がある。そこで、本節では、ラボラトリー方式の体験学習において使用される概念も使用して考察する。

ワークショップの企画・準備段階および実施段階では、場所、時間、参加者、スタッフ・チーム、ねらい、実習内容、ファシリテーターの役割や関わりなど様々な要因についての考慮が必要になる（柳原、2003、pp.5-18; メリット、2005、pp.177-180; 他）。当修養会の準備・企画段階で、筆者らはそれらの要因の内、ファシリテーターの視点からすると、（1）参加者のニーズと修養会の

¹¹ 北海道にて、ラボラトリー方式の体験学習を実施する研究会である。ヒューマンインターアクション・ラボラトリーのwebpage (<http://hi-laboratory.com/index.html>) を参照されたい。

ねらい、ねらいとプログラム内容がマッチしているか、(2) プログラム内容は参加者がその体験から学び・気づくことに寄与することができるか、(3) プログラム内容は侵襲的ではないか、について主に考慮し、議論した、と考えることができる。

本項では、上記3点について、アンケート結果を使用しつつ、グループ・ファシリテーターの視点から検討する。

(1) 参加者のニーズと修養会のねらい、ねらいとプログラム内容がマッチしているかに関して

まず、参加者のニーズと修養会のねらいがマッチしているかに関して検討する。「II-1-(1)ねらい」に記したように、クリスチャンの成長や学びに寄与する学習内容であることを中心にしつつ、ノンクリスチャンにとっても意義のある内容にすることが必要だと考えた。それを前提とした議論の結果、人生における選択に焦点を合わせ、その選択から自己理解を深めることをねらいとした。人生において選択が求められる場面が訪れることは、クリスチャンにもノンクリスチャンにも誰にでも生じる重要な出来事だと考えた。

KJ法のラベルに「ふりかえりや話し合いによる自己理解の深化」があった。アンケートに、自分を見つめ、ふりかえることができ、有意義であったことや、今考えるべきことに気づいたという意のコメントが複数あった。これらの結果は、自己理解の深化が、参加者のニーズに一定程度マッチしていたことを示している、と捉えることができる。

一つ目のねらい「自己理解を深めること」だけでは、参加者の中心であるクリスチャンにとって、信徒としての学びやそれに基づいた成長の方向性への気づきという面で深みに欠け、ニーズにマッチしないと推測できた。そのため、二つ目のねらいである「神様が作ってくださっている自分の姿を知る一助とする。」を追加した。KJ法のラベルに「自己と神様との関係への気づき」があった。アンケートに、神様が自分に求められていることや導きや、自分の神様への応答についてのコメントがあった。そして、それらについて考えることができたことの自分にとっての意義が記されていた。これらの結果から、二つ目のねらいを追加することによって、修養会に対するクリスチャンのニーズにマッチしたねらいの設定ができた、と考えることができる。

次に、ねらいとプログラム内容がマッチしているかに関して、検討する。一つ目のねらいは、プログラム全体を通して達成を目指した。課題に対する個人記入によって、自己の選択や選択の過程における行動の特徴に目を向けることができる、と考えた。さらに、他者と話し合い、比較することによって、共通点と相違点から自分らしさや自分の特徴をより明確に理解できる、と考えた。参加者のニーズと修養会のねらいがマッチしているかで検討したKJ法やアンケートのコメントは一つ目のねらいとプログラム内容がマッチしていたことを

示している、と捉えることができる。さらに、わかちあうことや自分と他者と比較することからの自己への気づきに触れたコメントが複数あった。これらのコメントも二つ目のねらいとプログラム内容が一定程度マッチしていたことを示している、と捉えることができる。しかし、次項で検討するように、一部の参加者にとって、前半部のプログラムはねらいの達成には役立たなかったため、それは今後の課題となった。

企画・準備段階で、二つ目のねらいが達成できるプログラム内容にすることが当修養会における一番の重要事項であると筆者らは考えた。そのため、二つ目のねらいを達成するために、前半のロールから離れて、自分に戻って考える設定について協議し、決定した。二つ目のねらいが達成できるためには、「気づきのメモ」に適切な項目を設定できることが肝要であった。

「気づきのメモ」項目2と3（資料6参照）の内、3はより重要である。3の項目に参加者が深く関与できるためには、自分が思っていた自分の姿と一致・不一致を考えることから「神による自己像」への気づきが深まる可能性があることを理解してもらうための心理的準備が必要だと考えた。その準備のためには、聖書の言葉を用いたメッセージが適切であるが、それを修養会内だけで行うことは不可能であり、礼拝の説教でも関連するメッセージを行うことを協議・決定できたことが重要な選択であった、と考える。

KJ法の「自己と神様との関係への気づき」の中には、「神様の導きや自分に求めている姿への気づき」と「自分のみこころへの応答や祈りについての気づき」があった。これらの気づきは、二つ目のねらいに関連した気づきであり、このような気づきが生まれたということは、プログラムの内容が二つ目のねらいが達成することに寄与した、と考えることができる。

(2) プログラム内容は参加者がその体験から学び・気づくことに寄与することができるかに関して

プログラム内容は参加者がその体験から学び・気づくことに寄与することができるかに関して、検討する。

まず、プログラムの前半部について、検討する。課題がプロ棋士を目指す過程における大きな選択という参加者にはなじみの薄い設定であるため、プロ棋士について少しでもイメージできる導入、三段リーグが多くの体験者にとって、いかに過酷な時期であるかの説明が必要だとの議論に基づき、短時間の中でそれらの点をどのように実現するかが企画・準備段階におけるファシリテーターの課題となった。導入と課題の説明後、参加者からいくつかの質問があり、それに答えた。それ以上質問がないことを確認して、プログラム前半の課題の個人記入とそのわかちあいを実施した。

KJ法のラベルに、「当修養会への肯定的見解と課題の指摘」があるように、上記の点に関して、効果的であった点と今後の課題の双方がある、と理解でき

る。参加者のコメントの中には、自分とは異なる立場になって考えることを通して、自分が大切にしていることを再発見できたことや、同じ設定における人生の選択やその過程が各自で異なるものの、それぞれが納得できる内容であったことについての記述が複数あった。これらのコメントから、プログラム前半部の課題は一定の意義があったことがわかる。

一方で、参加者のコメントの中に、仮定の設定に対する否定的見解もあった。参加者にこのような思いをさせてしまったことに筆者は大変申し訳なく感じている。そして、十分に検討すべき今後の課題だと捉えている。前半部の課題は、実人生とは異なる場面設定の中で、他者として考えるというロールプレイとなっている。ロールプレイの一般的な留意点として、ロールプレイの設定と現実との乖離が大きすぎる場合、効果的ではないというものがある。前半部の設定が実人生との乖離が大きく、導入の工夫や課題の説明が不十分だったと捉えることができる。

参加者のこの見解に関して、仮定という観点からやや意味をずらして、自分自身の実人生ではないという観点から考えてみたい。自分自身の人生が描かれていないという点においては、聖書の記述も同様である。しかし、そうであってもクリスチャンはそこに自分の姿をみて、自分へのメッセージを感じとる。今回のプログラムと聖書との違いは、そこに神の姿や言葉が明示的にあるのか、明示的ではないのか点にある、とみることもできるかもしれない。

2016年度のCRCの修養会では、聖書の三つの場面における主役と脇役の喜びを考えるとというテーマで、プログラムを実施した（資料1参照）。それらの場面における主役は、聖書に登場する人物であるが、脇役はその場面にいたであろうと想定できるが、聖書には登場しない人物であった。2016年度のプログラムでも、今回のプログラムと同様に、自分の実人生ではない設定であり、脇役は聖書に登場しない人物であったが、筆者の記憶では、このプログラムについての明確な否定的見解はなかった。2016年度のプログラムと今回のプログラムを比較すると、前述のように、そこに神の姿や言葉が明示的にあるのか、明示的ではないのか点にある、みることもできるかもしれない。

そうであるならば、今後、CRCの修養会においてプログラムを企画する際、聖書に直接関係の深いプログラムであれば、プログラムに違和感をもつ参加者をなくすことができると考えることができる。それに対して、修養会のプログラム企画者がある意図をもって、聖書に直接的には関係ないように感じる設定のプログラムを企画する場合は、その意図の説明や進行における配慮などにおいて、今回以上に丁寧に実施していく必要があると考えることもできる。これらの点については、今後の課題であると考えている。

次に、プログラム全体について検討する。KJ法の「自己と神様との関係への気づき」の中には、「神様の導きや自分に求めている姿への気づき」と「自分のみこころへの応答や祈りについての気づき」があり、これらは主に、後半

部のプログラムによって、参加者がえた気づきと考えることができる。神様の導きや自分に求めている姿、そして、それへの自分の応答や気づきというクリスチャンに重要な点について、学びを深めることができた、と捉えることができる。

KJ法の「ふりかえりや話し合いによる自己理解の深化」の中には、「自己を見つめ、ふりかえることによる個性への気づき」と「他者との話し合いによる自己への気づき」があり、これらはプログラム全体の中で、課題を通して、自己を見つめ、ふりかえり、それらをわかちあうことを通して、得られた気づきと考えられる。自己を見つめることを通して、自己への気づきが生じた。それをわかちあうという自己と他者の相互作用を通して、自己と他者の語りの異同からさらなる気づきを深めることができた、と推測できる。

さらに、「他者理解の深化について」について検討する。「(1)ねらい」に記したように、自己理解に特化して焦点を合わせた方がプログラムとして、よりよいのではないかと筆者らは判断し、原案の「自己理解や他者理解を深める」から他者理解を削除し、「自己理解を深める。」に修正した。

アンケートにおける参加者のコメントに関するKJ法の分析をみると、「話し合いによる他者理解の深化」の鳥があり、「神様との関係や主に召されていることの多様性への気づき」と「他者と話すことによる、神様の他者への導きや個性についての気づき」のラベルがある。この結果から、本修養会のプログラムは、参加者同士の他者理解の深化に寄与したことがわかる。その理解は、単に他者の心理的特性への気づきに止まらず、他者の神との関係性や神の導きの多様性への気づきである。わかちあいを通して、このような信仰にとって重要な気づきが参加者にもたらされたと考えられる。このような気づきは、参加者同士の、神の家族としての関係性の深化に大きく寄与すると推測できる。

(3) プログラム内容は侵襲的ではないかに関して

プログラム内容は侵襲的ではないかに関して、検討する。企画・準備段階で、筆者らは、プログラム後半部では、各自にとって信仰上重要で、繊細な体験を取り上げることになり、そのようなことを取り扱う前に、個人およびグループとしての準備性が整っている必要があると考えた。

前半部のロールプレイは、直接的に自分の体験ではないため、選択や選択を行うまでの過程を語ることは、自己体験を語ることに比べると、心理的なハードルは低い。そのような話題を通して、お互いが語り、聴きあうことによって、①自分の心がオープンになり、メンバー同士の関係が近づくウォームアップの意味や、②お互いの自己開示による関係性の深まりが期待できる、と考えた。さらには、③各自がそれぞれに異なる実人生を語るという設定と比較すると、共通の設定の中で考えるという行為は同じ枠組みの中での選択であるため、共通点や相違点から自分らしさ・自分の特徴がより明確化できる、と考えた。こ

これらの要素が、個人およびグループとしての準備性を高めることが期待された。

参加者のコメントには、自己の信仰上の重要な体験について語ることに關して、語ることを無理じいされた感じや他者から語りたくない部分にまで踏み込まれた感じについての記述はなかった。そこから、プログラム内容は侵襲的ではなかったと判断できる。

プログラム内容が侵襲的でなかった要因について考えたい。その要因として、①参加者の信仰の成熟度の高さ、②参加者の親密さ・関係性の深さ、③プログラムの流れが挙げられる。本項では、アンケート結果を用いて検討しているため、③について取り上げる。①と②も当然のことながら、本項のテーマに関連しているが、アンケート結果を用いて検討することは難しい。ここでは、①や②の要因もCRCの修養会のプログラムが侵襲的にならないことや意味深い学びが生まれる要因であるとの印象がこれまでの修養会の経過を通して筆者たちにあることを記すに止める。

前述のように筆者らは、前半のプログラムが、後半のプログラムに臨むにあたっての心理的準備性を高めていることを期待した。参加者のコメントには、ロールプレイがおもしろかったという意の内容があった。これは、前半部が上に挙げたウォームアップとして、有効に働いた可能性を示している、と考えることができよう。また、わかちあうことで、いろいろと考えることができる、よい交わりの場であったという意のコメントが複数あった。これらのコメントは、お互いの自己開示によって、関係性の深まりがもたらされたことを示している。異なる他者の立場から考えることによって、結果的に自分が大切にしていることや神の望まれる姿を再発見することができたという意のコメントが複数あった。これらのコメントには、前後半両方の内容が含まれており、前半部が導入となり、さらに後半に自己の体験や思いを語るという流れについて記されていると捉えることができる。そのような流れが、自己や他者、その多様な神の導きへの気づきを生む一因となったと考えることができる。

①～③が相まって、プログラム内容が侵襲的にはならず、参加者の学びや気づきの深化を促進できたと考える。

IV. 今後の課題

本稿は、2018年春に実施された修養会の実践を報告するとともに、それを事例研究的に検討することを通して、ワークショップ形式の修養会の意義と課題を信徒とグループ・ファシリテーターという複数の視点から考察することを目的とした。今後の課題として、以下の2点が挙げられる。

第一に、本稿の筆者には、キリスト教学、特にキリスト教教育を専門とする者がいなかった。そのため、キリスト教教育の観点から考察を深めることが十分にできなかった。榊原牧師を通して、本稿に關係するテーマについて複数の先生方に文献を教えていただいたにもかかわらず、それらの先行研究の知見を

十分に反映することができなかった。キリスト教教育に関する知見からより深い考察を実施することが今後の課題となる。

本稿は、2018年春に実施された修養会の実践を報告し、事例研究的に検討することはできた。しかし、それ以前に実施した修養会に関しては、概観するに止まった。未検討の修養会のプログラムには実践報告するに値する内容のものがあると考えられる。他の修養会のプログラムにも検討を広げることは今後の課題である。

備考：

執筆担当箇所は以下の通りである。「Ⅲ. 2018年春の修養会に関する検討」の「1. 信徒の視点より」は丹羽牧代が執筆した。「Ⅲ. 2018年春の修養会に関する検討」の「2. アンケート結果について」と「3. グループ・ファシリテーターの視点より」は楠本和彦が執筆した。他の箇所は、丹羽牧代と楠本和彦の共著である。

謝辞：

CRCの榊原康成牧師には、本稿に関連して情報提供や貴重なコメントをいただいた。また、本稿の分析・考察に問題がないか修養会参加者に確認する過程にも協力いただいた。深く感謝いたします。

修養会やキリスト教教育に関する文献について、榊原康成牧師を通して、松原洋満師と本澤敬子師に、キリスト教における信徒の成長・教会における教育のあり方・リーダー育成のヴィジョン、などなど多岐に亘って示唆をいただいたことに深謝したい。また、「キリストの似姿に向かって育つ」ということが内包するものの豊かさにあらためて感銘を受けるとともに、一編の論文では到底考察が及ばないことも痛感し、本稿では活かしきれなかったことをお詫びしたい。今後、教えていただいた文献についての理解を深め、続編に活かせるよう努力したい。

引用文献：

Boren, M. S.(2007). *How Do We Get There from Here?: Navigating the Transformation to Holistic Small Groups*. (Kindle Edition) Amazon Services International, Inc.

Gorman, J. (2001). *Small Groups in the Local Church*. in Michael J. Anthony (ed.) *Introducing Christian Education.*, pp.176-184. Baker Academic, Grand Rapids, Michigan.

川喜田二郎 (1967). 発想法—創造性開発のために— 中公新書.

川喜田二郎 (1970). 続・発想法—KJ法の展開と応用— 中公新書.

松原洋満 (2010). 新しい教会教育をめざして ～聖書と学習科学からのアプ

ローチ～「教会教育ノート」へようこそ！

<https://churcheducation.jimdofree.com/app/download/10384453791/%E6%96%B0%E3%81%97%E3%81%84%E6%95%99%E4%BC%9A%E6%95%99%E8%82%B2%E3%82%92%E3%82%81%E3%81%96%E3%81%97%E3%81%A6.pdf?t=1496295288> 最終閲覧日2021年1月3日.

松原洋満 (2017). スモールグループ「教会教育ノート」へようこそ！

<https://churcheducation.jimdofree.com/app/download/11060870391/%E3%82%B9%E3%83%A2%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%82%B0%E3%83%AB%E3%83%BC%E3%83%97.pdf?t=1496295307> 最終閲覧日2021年1月3日.

メリット リチャード (Richard Merritt) (2005). 学習者を援助する人について —教育, 宗教, そして人間性の回復— 南山短期大学人間関係科 (監修) 津村俊充・山口真人 (編) 人間関係トレーニング第2版 —私を育てる教育への人間学的アプローチ ナカニシヤ出版 pp.177-180.

中堀仁四郎 (1984). JICEラボラトリー・トレーニングの変遷 —その1— 人間関係 (南山短期大学人間関係研究センター), 創刊号,11-35.

Neighbour, R. W. (2010). *Christ's Basic Bodies: Embracing God's Presence, Power, and Purposes in Holistic Small Group Life, Cell Groups, Home Groups, Life Groups, and Biblical Communities* (Kindle Edition) Amazon Services International, Inc.

大橋秀夫 (2002). 21世紀の伝道を考える 5教会を生きかえらせるセルグループ (1) 月刊いのちのことば 2002年5月号.

オックスフォード キリスト教辞典 (2017). 木寺廉太 (訳) 教文館.

世界キリスト教百科事典 (1986). 教文館.

坂口順治 (1984). JICE 小史 (1) —1958-1964— キリスト教教育研究 (立教大学キリスト教教育研究所), 1,pp.46-63.

Shaeffer, F. A. (1972). *He is there and He is not silent*. Tyndale House Publishers. Wheaton, Illinois.

Stott, J. R. (1968). *One People*, Pennsylvania: Christian Publication. (石黒則年 (訳) (1990). 今求められる牧師と信徒のあり方 いのちのことば社)

柳原光 (1969). 小集団 高崎毅・山内一郎・今橋朗 (編) キリスト教教育辞典 日本基督教団出版局, pp.354-359.

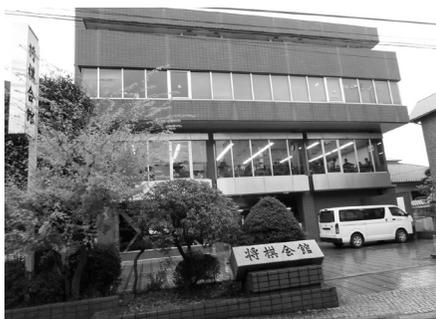
柳原光 (監修・著作) (2003). III. 実習 (Structured experiences) の位置づけ, IV. ファシリテーターの姿勢・態度と役割, V. 研修の立案・評価についての指針, VI. デザインするということについて 復刻版 Creative O.D. —人間のための組織開発シリーズ— Vol. I 行動科学実践研究会 プレスタイム, pp.5-18.

資料1 CRC 修養会一覧

時期	長さ	テーマ・主な内容	学び方・実習のタイプ
2004 年秋	1泊2日	信徒自身の中にある聖書の言葉を探求する/赦し	聖書クイズ/ケーススタディ（事例を用いたディスカッション）/価値観の明確化/牧師の講解説教
2005 年秋	1泊2日	礼拝をすることの大切さ・礼拝の意味（日曜日の誘惑/無人島へ一つだけもっていくもの/礼拝の中での安息/礼拝のプログラムを一つだけ残すとしたら）/イエスと自分との距離	ロールプレイとディベート/図式化/価値観の明確化/牧師の講解説教
2006 年秋	1泊2日	祈り（聖書の中での祈り、実生活の中での自分の祈り）	個人への問いかけ・個人の気づきとわかちあい/祈りの必要性についてのディベート/牧師の講解説教
2007 年春	半日	日々のデヴォーション（祈り）の学び	平日と日曜日の祈りの時間の図式化とわかちあい/牧師の講解説教
2007 年秋	1泊2日	葬儀について考える、祈り、人や社会との約束について考える（実習「閉ざされた村」）	個人への問いかけ・個人の気づきとわかちあい/牧師の講解説教
2008 年秋	1泊2日	人生の最期の時どうする？（最後の食事、処刑される時？）	個人への問いかけ・個人の気づきとわかちあい/牧師の講解説教
2009 年春	1泊2日	聖書の出来事を知る/信徒としての喜びに気づく/聖書にある喜びの追体験	聖書すごろく/ロールプレイ/牧師の講解説教
2010 年春	1泊2日	聖書の中の出会いによって起こったこと、信徒としての出会いによって起こること（イエス（または教会）との出会いの現在・過去・未来/聖書の登場人々のイエスとの出会い）	小グループやペアにおける気づきの自己開示とフィードバック/牧師の講解説教
2010 年秋	半日	自分や他者の喜びやお互いの喜びの違いに気づく	カードへの記入・カードのわかちあい、個人の気づきとペアでのわかちあい/牧師の講解説教
2011 年春	1泊2日	賛美について理解を深める（賛美を聴いて、その気持ちを現す/新しい賛美（歌詞）を作る）	小グループにおける気づきの自己開示とフィードバック/賛美（歌詞）の創作/牧師の講解説教

2012 年春	1泊2日	神を知り自分を知る（自分たちの体験を基に、神や神と人の関わりについて考える）	KJ 法的ワーク、気づきの自己開示とフィードバック/牧師の講解説教
2013 年春	1泊2日	神に従った聖書の人物の心を知る/なぞかけ（人物・物・オチ）/聖書の人物のなりきり演劇/自分（聖書の人物）ならどうする？	なぞがけ遊び/ロールプレイ/牧師の講解説教
2013 年秋	半日	自分の性質を知る、その自分がどのように神に仕えるのか（気質分析）	質問項目に答える、各自の気質の特徴を知る、わかちあい/牧師の講解説教
2014 年春	1日	自分の隠れた才能（賜物）を知る、その自分がどのように教会に仕えるのか（賜物発見）	質問項目に答える、わかちあい/牧師の講解説教
2014 年秋	半日	4コマまんが/友人のために何をするか	4コマまんがの吹き出しに言葉を創作する、そのまんがを演じる/牧師の講解説教
2015 年秋	半日	祈り/危機の時に何を期待し、何を祈るべきか	塩狩峠の各登場人物となって祈る内容を探る/牧師の講解説教
2016 年春	半日	喜びに思いをはせる	聖書の主人公や脇役の喜びについて想像し、ストーリーを創作する/牧師の講解説教
2017 年春	半日	飛び出す絵本/映像、仕掛け絵本によって自分に飛び込んでくる内容を受け止める	DVD：スーパーブックを鑑賞/牧師の講解説教
2018 年春	半日	神が作ってくださっている自分の理解を深める、実習「決断の時」	個人の選択、小グループにおける気づきの自己開示とフィードバック/牧師の講解説教

資料2 課題説明用スライド一覧



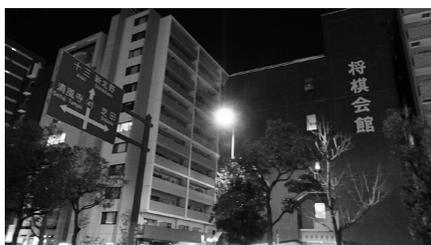
スライド1 東京将棋会館



スライド2 東京将棋会館入口付近



スライド3 対局風景（東京将棋会館）



スライド4 関西将棋会館



スライド5 三段リーグ対局風景
（藤井聡太三段）



スライド6 三段リーグ対局風景
（里見香奈三段）

第59回奨励会三段リーグ戦
2018年4月～2018年9月

順位	氏名	勝	敗	引	勝率	対局数	勝	敗	引	勝率	対局数	勝	敗	引	勝率	対局数	勝	敗	引	勝率	対局数
1	藤井 聡太	15	0	0	1.000	15	15	0	0	1.000	15	15	0	0	1.000	15	15	0	0	1.000	15
2	里見 香奈	10	5	0	0.667	15	10	5	0	0.667	15	10	5	0	0.667	15	10	5	0	0.667	15
3	青野 照市	8	7	0	0.533	15	8	7	0	0.533	15	8	7	0	0.533	15	8	7	0	0.533	15
4	佐藤 大樹	7	8	0	0.467	15	7	8	0	0.467	15	7	8	0	0.467	15	7	8	0	0.467	15
5	斎藤 大地	6	9	0	0.400	15	6	9	0	0.400	15	6	9	0	0.400	15	6	9	0	0.400	15
6	佐藤 大樹	5	10	0	0.333	15	5	10	0	0.333	15	5	10	0	0.333	15	5	10	0	0.333	15
7	佐藤 大樹	4	11	0	0.267	15	4	11	0	0.267	15	4	11	0	0.267	15	4	11	0	0.267	15
8	佐藤 大樹	3	12	0	0.200	15	3	12	0	0.200	15	3	12	0	0.200	15	3	12	0	0.200	15
9	佐藤 大樹	2	13	0	0.133	15	2	13	0	0.133	15	2	13	0	0.133	15	2	13	0	0.133	15
10	佐藤 大樹	1	14	0	0.067	15	1	14	0	0.067	15	1	14	0	0.067	15	1	14	0	0.067	15
11	佐藤 大樹	0	15	0	0.000	15	0	15	0	0.000	15	0	15	0	0.000	15	0	15	0	0.000	15

スライド7 第59回奨励会三段リーグ戦
（一部抜粋）

三段リーグの厳しさは、絶望感との戦いである。（中略）4期で抜けた私でさえ「上がれなかったらこのビルの屋上から飛び降りるのか」という夢を、何回見たかわからないからである。



青野照市九段

出典：<https://www.zakzak.co.jp/soc/news/180415/soc1804150001-n2.html>

スライド8 三段リーグについてのコラム
（青野照市九段）

退会が決まった後は、将棋会館からすぐ帰途についていたのですが、まっすぐ家に帰れなかったんですよ。(中略)頭の中はいろんな思いでパニック状態でした。(中略)プロ棋士を目指したこと自体も悔やみました。なぜそんなにリスクの高い生き方よりも、みんなと同じように大学へ行って、会社に入ってしまう普通の人生を選ばなかったのか。本当に、12年間、将棋なんかやらなきゃよかったって思いましたし、自分がやってきたこと全てが無駄だったっていう気になりましたね。しまいには将棋そのものを恨みました。将棋にさえ出会わなければこんな目にあうこともなかったって。悪いのはすべて将棋だった。

スライド9 三段リーグについての
インタビュー記事
(瀬川晶司五段)

それは単なる挫折感というような生易しいものじゃなかったです。なんていうかもう、自分の人生が終わったような感じでしたね。小学生のころから将棋にすべてを賭けてきた身にとっては、将棋がなくなったわけですから、自分には何もない、もう本当にゼロなんです。自分の体をぐちゃぐちゃにして、消し去りたい衝動に駆られるほどでした。



瀬川晶司五段

出典：<http://www.jinzai-bank.net/edit/info.cfm/tm/100/>

スライド10 三段リーグについての
インタビュー記事 (続き)
(瀬川晶司五段)

スライドの出典：

スライド3：第30期竜王戦6組ランキング戦 加藤一二三九段 vs 藤井聡太四段 パート6

<https://www.youtube.com/watch?v=XowDf28KIkW> より

スライド5：日本将棋連盟 将棋コラム藤井聡太四段も5敗！？ プロへの最終難関である「三段リーグ」とは？ https://www.shogi.or.jp/column/2017/12/post_285.html より

スライド6：日本将棋連盟 将棋ニュース 里見香奈奨励会員、女性として史上初の奨励会三段に！ https://www.shogi.or.jp/news/2013/12/post_892.html より

スライド7：日本将棋連盟 第59回奨励会三段リーグ戦 の一部を掲載 <https://www.shogi.or.jp/match/shoreikai/sandan/59/index.html> より

スライド8：青野照市九段(2018年6月現在) 三段リーグは人生かけた絶望との戦い 「上がれなかったらこのビルの屋上から飛び降りるのか」という夢を何回見たかわからない の一部を引用 <https://www.zakzak.co.jp/soc/news/180415/soc1804150001-n2.html> zakzak 2018.4.15.

スライド9・10：瀬川晶司五段(2018年6月現在)のインタビュー記事 プロ棋士 瀬川晶司 その2 奨励会退会 後悔と絶望と怨嗟の日々 の一部を引用 <http://www.jinzai-bank.net/edit/info.cfm/tm/100/> 人材バンクネット 転職研究室 魂の仕事人 第26回 2007.10.8.

資料 3

実習「決意の時」

設定：

この課題で、あなたは、じゅんという人物になったつもりで考えてください。

あなた(じゅん)は、今、人生の大きな岐路に立っています。

あなたは二つの立場をもって、生きています。一つは、名古屋にある有名私立大学の3年生です。もう一つは、あなたは将棋のプロを目指す、奨励会に入っています。現在、三段で、勝ち抜くとプロ棋士になれる三段リーグで戦っていますが、21歳になった今期も四段に昇段することはできませんでした。三段リーグを何年も勝ち抜くことができず、だんだん自信がなくなってきて、自分は本当にプロ棋士になれるのか、大きな不安を抱えつつ、三段リーグでの対局を行っています。

今、あなたが迫られている大きな選択は、次のようなものです。

数ヶ月後の4月に、将棋のプロを目指し、将棋と学業を両立させるのか、あるいは今年は大学を休学して、将棋に専念するのか、それとも将棋のプロになることは諦めて、就職活動をするのかの選択を迫られています。そして、どの道を選ぶのか、将棋の師匠と自分の両親に、三日後に伝えなければなりません。

この選択をする上で次のようなことが関連しています。

- ① 就職活動と三段リーグでの対局を掛け持つことはスケジュール上も困難ですし、将棋の師匠から「そんな中途半端なことは絶対に許さん！」と言われていました。
- ② 三段リーグは、半年間に各自18戦します(1ヶ月に約3戦)。全国の三段約30名の内、上位成績2名が四段に昇段でき、プロ棋士になることができます。
- ③ じゅんは約9年間前の小学6年生の時、奨励会の入会試験に合格し、プロ棋士を目指し、昇級・昇段を果たし、約4年前の高校2年生で三段になることができました。
- ④ 奨励会には年齢制限があり、満26歳までに四段に昇段できない場合、退会となり、原則的にはプロ棋士になることを諦めなければなりません。じゅんには、あと、約5年の猶予があることになります。

両親はクリスチャンで、じゅんは、子どもの頃から、CRCの礼拝に出ています。じゅんがクリスチャンなのか、ノンクリスチャンなのかは、あなた(自分自身)が選択して、○をつけてください。

じゅんは (クリスチャン ・ ノンクリスチャン)

資料 4

実習「決意の時」

課題：

幸いにも、3日後まで、対局も大学の授業もないため、この3日間はこの選択をするために、自由に時間を使うことができます。

1)あなたは、この3日間をどのように使いますか？できるだけ具体的に考えてください。

例えば、人に相談するとしたら、どのようなことを、誰に相談したいですか？

2)そのような過ごし方を選んだ理由はどのようなものですか？

3)プロ棋士を目指しますか？それともプロ棋士は諦めて、就職活動を行いますか？

4)その選択をする時に、大事にしたことは何ですか？

参考のために、3日間の過ごし方について、以下に、例を挙げておきます。その中から選んでもいいですし、他の選択を行ってもかまいません。いくつかを組み合わせてもかまいません。

例)

・人に相談する。

相談相手としては、次のような人々が考えられます。将棋の師匠、先輩棋士、両親、兄弟、榊原牧師夫妻、CRC に来ている大人や同世代の人々、幼馴染や大学の友人や先輩、大学の先生や学生相談室カウンセラー、など。

・神様にひたすら祈る。

山中にある一人で祈ることができる祈りの場にこもって祈る。教会の会堂で祈る。自分の家で祈る、など。

・一生懸命、一人で考える。

一人旅をしつつ考える。山に登りつつ考える。将棋盤の前で考える。ヒントが書いていそうな本を読みつつ考える、など。

・その他

頭を真っ白にするため、走る。気分転換のために、マンガを読む。考えるのを止めて、逃亡する、など。

資料 5

実習「決意の時」

あなたの選択とその理由：

- 1) あなたは、この3日間をどのように使いますか？できるだけ具体的に考えてください。
- 2) そのような過ごし方を選んだ理由はどのようなものですか？
- 3) あなたはどの選択を行いますか？○をつけてください。
 - ①将棋のプロを目指し、将棋と学業を両立させる
 - ②将棋のプロを目指し、今年は大学を休学して、将棋に専念する
 - ③プロ棋士は諦めて、就職活動を行う
 - ④その他 _____
- 4) その選択をする時に、大事にしたことは何ですか？(考慮した要素や望む生き方など)

資料 6

実習「決意の時」 気づきのメモ

<課題のわかちあい後に記入>このメモを基に、話せる範囲内で再度語り合います。

1.この課題で、じゅんとして選択したことやそれに関する思いを再度、見つめてみた時、それらことから、自分らしさや自分の特徴が見えてくるかもしれません。思いついたことを記してください。例えば、3日間の過ごし方や将棋を続けるか止めるかを選んだ時に重視した点はどのようなものでしたか？そこに自分の大事にしていることが反映されているかもしれません。また、他の人の選択やその理由と比較した時、その異同から自分らしさが見えてくるかもしれません。

<榊原牧師のメッセージの後に記入>

すべての項目を記入する必要はありません。書ける項目だけで結構です。また、このメモを基に、話せる範囲内で再度語り合います。メモは提出せず、自分で持ち帰ります。

ルール(じゅん)から離れて、自分に戻って考えてみてください。

2.以下のような時に、あなたは、神様や周りの人々と、あなたはどのように関わり、語ってきましたか？また、もらった言葉などで、心に残っていることはありますか？

<自分自身の今までの大きな選択をしようとした時>

<歩みの中で迷った時>

資料6の続き

3. あなたは、神様が自分に求めておられる自分の姿や生き方を意識したことがありますか？

それは、どのような時、どのようなものでしたか？また、神様が自分に求める姿は、自分が思っていた自分の姿と一致していたでしょうか？

それともズレがあったのでしょうか？ズレがあったとすれば、それはどのようなズレだったのでしょうか？

どのような時
どのような内容
神様が求める姿と 自分が思っていた自分の姿との一致・不一致

資料 7

「私らしさ、私のイメージ」記入用紙

修養会を通して、気づいたあるいは再認識した、私らしさや私のイメージを表現してみてください。
言葉で記してもいいですし、色や形や線で表現してもかまいません。

2018 年度 CRC 修養会 アンケート

1. この修養会で、あなたは
どの程度満足しましたか。
(どのような点で)

1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 --- 6 --- 7

不満足 満足

2. この修養会は、あなたにとって
どの程度意味がありましたか。
(どのような点で)

1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 --- 6 --- 7

全くなかった 大変あった

3. 修養会で感じたこと、考えたこと、気づいたこと、学んだことなどを自由に記してください。

実習使用規定

ラボラトリー方式の体験学習に関するツールを公開することで、ラボラトリー方式の体験学習が広く普及することを願って、第7号(2008)より「実習」を掲載しております。ここに掲載されている実習は、当センター研究員とその仲間によって開発され、これまでの教育実践で用いられてきたものです。使用の際には以下の留意事項をお守りください。

なお、ラボラトリー方式の体験学習を実施する際には、まずはご自身がラボラトリー方式の体験学習を体験されることをお勧めします。当センターではラボラトリー方式の体験学習を用いた公開講座を開催しております（詳しくは当センターの Web ページ <http://www.nanzan-u.ac.jp/NINKAN/> をご参照ください）。体験学習のファシリテーションを学んだ上でご使用ください。

実習を使用する際の留意事項

1. 著作権は著者に属します。実習を販売することや、営利目的の発行物などに転載することは禁止します。なお、教育目的での無料の発行物などに転載を希望される場合は、当センター事務局にお問い合わせください。
2. ラボラトリー方式の体験学習として教育・研修などに使用される場合には、各実習の課題シート（実習の指示書）に出典を明記してください。使用の際に当センターや著者に許可を得る必要はありません。また、使用料も発生しません。

【出典の記入例】

出典：大塚弥生（2008）「グループ エントランス」
南山大学人間関係研究センター 人間関係研究, 第 7 号より

3. 課題シート（実習の指示書）をそのまま使用するのではなく、プログラムの実施状況に合わせて適宜修正・変更した上で使用する場合は、「参考」として出典を明記してください。
4. ラボラトリー方式の体験学習で大切にされている教育観（学習者中心の教育、非操作の教育、学習者が自らの人間的成長に取り組む教育）に反する使用は禁止します。たとえば、営利目的で学習者を操作する自己啓発セミナーなどでの使用は一切禁じます。